

## いじめの被害者経験と、その自己開示と成人期の愛着との関係

三宅 邦 建

### Adult attachment and victimization of bullying

Kunitate MIYAKE

#### Abstract

The purpose of the present study was to investigate the effects of the victimization of bullying and a self-disclosure of the experience on adult attachment. Four hundreds college students answered the questionnaire. The results showed that those who were bullied during the pre-adolescent period lowed secure attachment. Moreover, those who disclosed the victimization experience to someone increased secure attachment and decreased insecure attachment. However, the positive effects of disclosing negative experience were found only among female students. The sex difference in the effect of the self-disclosure was interpreted in terms of the gender roles imposed upon the two sexes. The contribution of the present study was to relate the pre-adolescent experiences to adult attachment

Key words : Adult Attachment, Victimization of Bullying, Self-disclosure

キーワード： 成人期の愛着, いじめの被害者経験, 自己開示

#### 問 題

乳幼児期の体験が後の人生に大きな影響を持つことは殊更言うまでもない。Bowlby (1969, 1973a, 1973b) は乳幼児が養育者との間に形成する関係を愛着の理論として体系化した。愛着理論に拠れば、人生のごく初期に対人関係の基本的な型が形成され、後の人生の対人関係の原型として影響を及ぼすという。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) はBowlby (1969, 1973a, 1973b) の理論を受け継ぎ、見慣れぬ場面 (strange situation) を用い幼児の母親との分離—再会状況での行動から、安定型 (secure), 回避型 (avoidant), アンビバレント (anxious/ambivalent) という愛着の基本的な3つの型を操作的に定義した。

社会心理学の分野では Hazan & Shaver (1987) が幼児期の愛着行動と成人期の異性関係との類似性に注目し、

成人期の異性愛の起源を乳幼児期の愛着体験に求め、Ainsworth, et al. (1978) の3つの愛着の基本型に対応する成人期の愛着の型 (スタイル) を提案した。安定型の愛着を持つ者は他人と親密な関係を持つことに抵抗感がなく、相手に心地よく頼ったり頼られたりできる。回避型の者は、親密な関係を持つことに抵抗を感じ、相手を完全に信じたり依存したりすることができず、また人からそうされることに戸惑いを感じる。最後に、アンビバレント型の者は相手は自分が望むほど、また自分がするほど親しくしようとせず、相手が本当は自分のことを好きではないと疑ったり、自分の傍らから去っていつてしまうのではないかと過度な心配をする。Hazan & Shaver (1987) は恋愛場面におけるこれら3つの愛着の型を別々の記述にまとめ、最も当てはまるもの一つを被験者に選ばせ成人期の愛着の型を測定した。この先駆的研究以来、数多くの成人期の愛着研究がなされ、社会心

理学では、3つの愛着の型の恋愛行動や愛着対象者および自己イメージの検証が中心的研究課題となった。

本邦では、高橋(1968; 1970; 1980)を初め、戸田(詫摩・戸田1988; 戸田, 1991)が成人期の愛着研究に先鞭をつけた。高橋(1968; 1970; 1980)は依存性を精神的な助力を求める欲求と定義し、依存の対象や依存の様式(接近行動, 助言・援助希求等)が発達と共に変化することを中, 高, 大学生を被験者とした研究で示した。依存性は自立欲求が高まっても減少せず、高橋(1980)は依存性を成人にも見られる健全な社会的欲求として、親友や恋人など重要な他者に向けられる愛着欲求であると位置付けた。一方、戸田(詫摩・戸田1988; 戸田, 1991)は Hazan & Shaver (1987) の3つの愛着の型の記述を18の項目に作り直し、成人期の愛着の3つの型を別々に尺度得点化するリカート尺度を作成した。詫摩・戸田(1988)はこの尺度を使い、成人期の3つの愛着下位尺度(次元)得点が恋人のイメージや両親のイメージ(幼少時代の記憶)と関連し、また恋愛体験も愛着の3次元と関わっていることを見いだした。これらの先行研究は、愛着の概念が幼児期に限定されず、それ以降の重要な他者との対人関係にも適用できることを示している。本研究では成人期の愛着を、母子関係や恋愛関係ではなく、児童期から思春期にかけての友人関係での大きな出来事と関連させて研究する。具体的には、詫摩・戸田(1988)の尺度を使い、いじめにあった経験とその経験の自己開示が、成人期(大学生)の3つの愛着下位次元得点にどう影響しているのかを調べる。

### 愛着の対象, 愛着の型の変化

個人の発達が進むにつれ養育者との直接的な接触行動は減少し、思春期にあっては同性の友人、仲間集団の重要度が増し(高橋, 1968; 1970; Weiss, 1982)、愛着を向ける特定の異性の重要度も成人期に近づくにつれ増大する(Hazan & Shaver, 1994)。愛着の理論に従えば、乳幼児期に形成された愛着のスタイルはその後の愛着の在り方の原型となり、養育者との直接的な接触が減少してもなかなか変化せず一貫性を持ちやすいという。しかしながら、愛着のスタイルは鋳型のように決して変化しないものではなく(戸田, 1991)、乳幼児期における養育者との愛着関係によって規定されつつも、日常生活でのさまざまな対人出来事によって確認・補強されたり、解体そして再構築されると思われる。事実、実証研究は青年期前期の1年から4年の期間内で30%位の者の愛着のスタイルが変化することを示している(Baldwin & Fehr, 1995; Davila, Burge, & Hammen, 1997;

Kirkpatrick & Hazan 1994)。変化をもたらす要因として、Feeney, Noller, & Callan (1994) と Kirkpatrick & Hazan (1994) は恋人との別れや順調な結婚生活が関わっていることを報告している。しかし、Davila, et al. (1997) は対人関係よりむしろ変化への脆弱性などの個人的傾性の影響があるとしている。変化を促す要因についての実証研究はまだ少なく、現時点では明瞭な解答はないようである(Scharfe & Bartholomew, 1994)。

### いじめられた経験と成人期の愛着

社会心理学では、成人期の愛着のスタイルと幼児期の養育者の記憶や成人期の異性関係に注目する研究が多く、幼児期と成人期の中間に位置する児童・思春期の経験と成人期の愛着を研究対象とすることが少ない。児童・思春期の対人環境は全ての子ども達にとって順風満帆とは決して考えられない。多くの者が愛着の在り方に大きな変更を迫るような対人関係のつまづきを経験する。一つの例は小中学校でのいじめである。いじめが深刻化して、何人もの児童・生徒が登校拒否、対人不信に陥り、自殺者まで出ている。仲間集団からの虐待的取り扱い、忘れ難い心的外傷経験(トラウマ)であり、臨床的事例研究は(立花, 1995)いじめられた経験の何年間にもわたる長期的な影響を報告している。

児童期から思春期にかけての重要な発達課題は同性との仲間関係を確立することであろう(Sullivan, 1953)。この重要な時期での対人関係のつまづきは、青年・成人期の愛着、対人適応に否定的な影響を及ぼすであろう。直接愛着の問題を取り扱っていないが、坂西(1995)はいじめられた経験の長期的影響を調査している。坂西によると大きな苦痛をともないじめられた経験をした者ほど、大学生になってからも体の不調、自信喪失、対人関係への敏感さ、対人嫌悪症などの症状を示すという。この研究は、所属集団からの虐待的処遇(いじめ)は被害者を孤立させ対人不信に陥れ、その後の愛着の在り方に影響を及ぼすことを暗示している。いじめの被害者経験は愛着の健全な発達に支障をきたすと考えられ、いじめの被害者は安定的愛着を減少させ、対人不全(回避、アンビバレント)を増加させるとまず考えられる。

いじめの被害者経験を誰にも話さず一人で悩むケースが多いが、人は対人環境の消極的受け手ではなく、何らかの解決行動をとろうとする。いじめの有効的解決策は当然ながらいじめをやめさせることであるが、いじめというトラウマ経験からの回復の有効策はなんだろうか。Pennebaker (1989)は一連の研究でトラウマ経験を告白した者はしなかった者に比べ、否定的経験からの

回復が見られ、精神的・身体的健康が向上し得ることを報告している。経験とそれに伴う感情を抑圧しないで開示することが、疾病に対する免疫力の維持に役立つという。Pennebaker (1989) の研究では扱われていないものの、いじめの被害者経験の自己開示も治癒効果があると思われる。自己開示はいじめられた経験の自己理解に役立つだけでなく、開示者は愛着関係の基礎である依存性と社会的支援という対人関係の強化を計ることができると考えられる。例えば、Vernberg, Ewell, Beery, Freeman, & Abwender (1995) は中学1, 2年生を被害者にした研究で、いじめられた経験は孤独感を増加させたが、その経験を自己開示した生徒の間では逆に孤独感が減少したことを報告している。いじめの被害者経験は愛着の発達に否定的な影響をもたらすであろうが、その経験の自己開示は否定的な影響を軽減すると考えられる。つまり、いじめられた経験を自己開示した者は、しなかった者に比べ安定的愛着が高く、回避、アンビバレント傾向が低くなると予想できる。

いじめの被害者経験の影響に性差はあるのだろうか。坂西(1995)は被害者経験の影響の興味ある男女差を報告している。女子の被害者は男子の被害者に比べ、他人の態度により敏感になったが、他人の気持ちをよく考えるようにもなったと答えた。この結果は、いじめの被害者経験を通して女子は男子に比べてより共感的対人関係を得たことを示している。更には、女子の被害者は男子の被害者に比べ、体の不調(不眠や疲労)を訴えることが少なかった。坂西(1995)の研究はいじめの被害者経験の影響は女子と比べ男子により否定的であることを示しているが、この男女差の理由は明らかにされていない。

トラウマ経験を自己開示することは治癒効果があり、この効果はいじめられた経験の自己開示にも見いだされると予想した。自己開示研究は、自己開示の質と量に男女差があることを示している。例えば、児童・思春期を扱った研究では、Rivenbark (1971) は全体的に女子のほうが男子より自己開示が多く、この傾向は小学校から高校にかけ学齢が高くなるほど顕著になることを見いだした。Dindia & Allen (1992) は、一般的に女性の方が男性よりも自己開示が多いことをメタ分析で明らかにした。更には、ソーシャルサポート研究では、Burda, Vaux, & Schill (1984) が、女子の方が男子より情緒的ソーシャルサポートを相手から引き出すことに長けていることを見出した。これらの研究を考慮すると、男子よりも女子の方が自己開示を通して、いじめられた経験の愛着への否定的な影響を緩和すると想像できる。いじめられた経験の開示者は非開示者より安定的愛着が高く、

回避とアンビバレント傾向が低くなると予想したが、この開示者と非開示者の差は女子により顕著だろうと考えられる。

### 仮説

本研究では成人期の愛着を児童・思春期のいじめられた経験とその自己開示との関連において研究し、以下の3つの仮説を検証する。

仮説1：いじめの被害者は非被害者に比べて、安定次元得点が低く、回避とアンビバレント次元得点が高くなるだろう。

仮説2：いじめの被害者経験を自己開示した者はしなかった者に比べて、安定次元得点が高く、逆に回避とアンビバレント次元得点が低くなるだろう。

仮説3：いじめの被害者経験の自己開示の愛着への影響は、男子よりも女子により顕著に見い出されるであろう。つまり、仮説2で予測された結果は、女子によりあてはまるだろう。

### 方法

**被験者** 被験者は地方の4年制の国立大学(2校)、私立大学(2校)の学生442名(男子231名、女子209名、性別不明2名)であった。学年別の内訳は342名(1年生)、42名(2年生)、37名(3年生)、15名(4年生)、6名(学年不明)であった。平均年齢は19.6才(男子:19.7才、女子:19.4才)であった。調査実施時期は1997年の11月から12月にかけてであり、他の調査の一部としてクラス時間を利用して実施された。回答は無記名が原則であったが私立大学1校(87名)については再テスト信頼性を確認するため、学生番号の記入を求めた。また、1大学を除いてクラス担当の教員以外の者がデータの収集に当たった。

**質問紙** 成人期の愛着は詫摩・戸田(1988)による18項目の成人期の愛着尺度を用いた。この尺度はHazan & Shaver (1987)の尺度を参考にし、3つの愛着のスタイルを記述する文章を多項目尺度として再構成したものである。成人期の愛着尺度は安定尺度、回避尺度とアンビバレント尺度のそれぞれ6項目ずつの3つの下位尺度から成り、愛着の3次元を得点化する。安定尺度は“気楽に頼ったり頼られたりすることができる”などの項目を含み、親密で依存的な対人関係への抵抗感のなさを測定する。回避尺度は“私はあまり人に頼るのは好きではない”などを含み、過度の自立と対人回避を特徴とする。最後にアンビバレント尺度は“友達が本当は私を好いていてくれないのではないかと心配になる”で

代表される対人不安や過度な依存性が特徴である。各項目に「全くあてはまらない」から、「大変当てはまる」の7件法で答えるよう求めた。各次元の得点は6項目の得点を合計し、高得点ほどその次元の特徴が多いことを示す。愛着下位尺度の再テスト信頼性(9ヶ月)は松本(1988)が.75(安定), .55(回避)と.64(アンビバレント)であったと報告している。

いじめの経験質問紙には以下の4項目が含まれていた。<sup>(註1)</sup>(1)以前に「いじめ」の被害者になったことがあるか、「はい」、「いいえ」(2)そのとき誰かに話したかどうか、「はい」、「いいえ」(3)誰に話したか、「両親」、「友だち」、「先生」、「その他」(4)いじめにあった時期、「幼稚園」、「小学校」、「中学校」、「高校」。この質問紙は順序効果を避けるため、他の質問紙の間に無作為に挿入された。

## 結果

### 愛着尺度の信頼性と下位尺度間の相関係数

学生番号を記入した87名の被験者は2週間後に再度愛着尺度に回答した。再テスト信頼性は、.75(安定尺度), .68(回避尺度), .75(アンビバレント尺度)であった。また被験者全体の内的整合性( $\alpha$ 係数)は、.85(安定尺度), .79(回避尺度), .85(アンビバレント尺度)であった。愛着尺度の信頼性は十分であると認められた。

下位次元間の相関係数は、-.26(安定-回避), -.28(安定-アンビバレント), .19(回避-アンビバレント)であった。各次元間の独立はかなり保たれていると思われた。被験者全体では、成人期の愛着の各次元の平均値は24.31(安定), 19.34(回避), 22.23(アンビバレント)であった。

### いじめの被害者経験、自己開示と自己開示相手の割合

いじめの被害者経験・開示群の人数は303名(被害者になったことがない), 84名(被害者になりそれを誰かに話した), 53名(被害者になったが誰にも話さなかった)であり、全体の31.1%にいじめられた経験があった。男女別の人数は166, 31, 33名(男子)と137, 53, 20名(女子)であり、男子の27.8%, 女子の34.8%にいじめの被害者経験があった。いじめの被害者経験の有無の割合には男女差がなかったが、 $\chi^2(1) = 2.46, p < .15$ , いじめの被害者経験群内で自己開示した者の割合には男女差があった。男子の48.4%が自己開示したが、女子では72.6%であった、 $\chi^2(1) = 8.40, p < .01$ . 自己開示の相手は両親, 友だち, 先生/その他の順に52.4%, 32.9%, 14.6%であり、開

示相手の割合には男女差がなかった、 $\chi^2(2) = 3.06, ns$ .

表1 いじめの被害者経験の有無×自己開示の有無(クロス集計)

いじめられた経験 自己開示	無し		有り <sup>a</sup>	
	有り	無し	有り	無し
男子	166	31 (48.4%)	33 (51.6%)	
女子	137	53 (72.6%)	20 (27.4%)	
全体	303	84	36	

a 「いじめられた経験有り」群内で男女別々に自己開示の有無の割合を計算した。

### 被害者経験・自己開示の愛着次元得点への影響

いじめの被害者の経験と誰かに話したかどうかの項目を組み合わせ、(1)被害者になったことがない(2)被害者になり相談した(3)被害者になったが相談しなかったの経験・開示3群に分けた。経験なし, 経験・開示あり, 経験・開示なしの3群間で愛着の各次元得点を比較した。データの欠損を除いた440名が分析の対象となった。いじめの被害者経験の有無とその経験の自己開示の有無が、どのように各愛着次元得点に影響しているのかを、階層的重回帰分析(Hierarchical Multiple Regression)を用い愛着の次元得点を基準変数とし、性別、いじめの被害者経験・開示群を説明変数として分析した。<sup>(註2)</sup>性別はダミーコード化し、男子を1, 女子を2とした。いじめの被害者経験・開示群(3群, 自由度=2)は仮説1と2を検証するために2つの直交(独立)する対比コード変数で表した(Cohen & Cohen, 1983参照)。最初のコード変数(C1と表記)は、+2を経験なし群に、-1を経験・開示あり群、-1を経験・開示なし群に付与し、いじめの経験の有無の愛着次元得点への影響を比べる。つまり、C1対比はいじめられた経験のある者とない者を直接比較する仮説1の計画された比較(planned comparison)である。有意なC1対比効果は、いじめの非被害者と被害者との間に愛着次元得点に違いがあったことを意味する。二番目のコード変数(C2)は、0(経験なし群), +1(経験・開示あり群), -1(経験・開示なし群)であり、いじめの被害者群内で開示者群と非開示者群の愛着次元得点を比べる。C2対比は仮説2を検証する計画された比較であり、有意なC2対比効果は、開示群と非開示群との間に愛着次元得点に違いがあったことを意味する。C1対比(いじめられた経験の有無対比)とC2対比(経験の自己開示有無対比)は独立しており(直交, orthogonal), いじめの経験・開示の主効果(3群, 自由度=2)の平方和を分割したものである。最後に、性

別×経験・開示交互作用を方程式に挿入した。この交互作用は自由度が2であり、性別×C1対比と性別×C2対比という2つの独立した交互作用に分割した。有意な性別×対比コード交互作用は、仮説1と2で予測された結果が男子もしくは女子に顕著であることを示す。性別×C2対比が仮説3を検証する計画された比較である。階層的重回帰分析では、説明変数は、最初に性別を挿入し、C1とC2対比を一括挿入後、最後に性別×C1と性別×C2対比を一括挿入した。

表2に、いじめの被害者経験・開示3群の愛着3次元得点を全体と男女別に示した。

表2 いじめの被害者経験、経験の自己開示と愛着次元得点

	経験なし	いじめの被害者	
		経験あり 自己開示あり	自己開示なし
安定次元			
全体	24.54 (5.21)	24.87 (6.04)	22.08 (5.18)
男子	24.89 (5.67)	22.48 (6.22)	22.42 (5.53)
女子	24.11 (4.60)	26.26 (5.52)	21.50 (4.64)
回避次元			
全体	19.23 (6.07)	18.90 (6.17)	20.75 (4.78)
男子	20.06 (6.23)	19.10 (7.31)	21.00 (6.85)
女子	18.22 (5.74)	18.79 (5.47)	20.35 (4.64)
アンビバレント次元			
全体	21.85 (5.86)	22.42 (6.55)	23.91 (7.07)
男子	21.94 (5.89)	24.32 (6.77)	22.85 (6.85)
女子	21.74 (5.85)	21.30 (6.21)	25.65 (7.26)

括弧内は標準偏差

以下に、階層的重回帰分析の結果を述べる（表3に結果を示した）。最初に安定次元であるが、性別の主効果は有意ではなかった。仮説1の検定であるいじめられた経験の有無対比（C1）は傾向意であった、 $t(436) = 1.89, p < .10$ 。仮説2を検定する自己開示の有無対比（C2）は有意であった、 $t(436) = 2.92, p < .01$ 。いじめの被害経験者は非経験者より安定次元得点が低い傾向にあり、いじめられた経験を自己開示した者はしなかった者より安定次元得点が高かった（24.87 vs 22.08）。仮説1と2は安定次元得点に関して支持されたと言える。交互作用であるが、性別×経験有無対比（C1）交互作用は傾向意であった、 $t(434) = -1.93, p < .10$ 。いじめの被害者経験の否定的影響は男子により顕著な傾向が見られた。仮説3を検定する性別×自己開示有無対比（C2）交互作用は有意

であった、 $t(434) = 2.44, p < .05$ 。表1から明らかのように男子の間では、自己開示の有無は安定次元得点と関係がなかったが、女子では自己開示群の得点は非自己開示群の得点より高かった。つまり、いじめの被害者経験を誰かに開示した者の高い安定次元得点傾向（主効果）は女子の間で見出された。

表3 愛着次元得点の重回帰分析

	$\beta$	$t$	$p$
安定次元			
性別	.02	.37	ns
経験有無対比(C1)	.09	1.89	.060
自己開示有無対比(C2)	.14	2.92	.004
性別×C1対比	-.13	-1.93	.054
性別×C2対比	.39	2.44	.016
回避次元			
性別	-.13	-2.65	.009
経験有無対比(C1)	-.05	-1.09	ns
自己開示有無対比(C2)	-.07	-1.42	ns
性別×C1対比	-.17	-1.07	ns
性別×C2対比	.03	.16	ns
アンビバレント次元			
性別	-.03	.66	ns
経験有無対比(C1)	-.10	2.06	.041
自己開示有無対比(C2)	-.06	-1.28	ns
性別×C1対比	-.01	-.07	ns
性別×C2対比	-.42	-2.62	.009

N=440（経験なし=303名、経験-開示あり=84名、経験-開示なし=53名）  
 性別コード：（男子、女子）=（1, 2）  
 C1対比コード：（経験なし、経験-開示あり、経験-開示なし）=（+2, -1, -1）  
 C2対比コード：（経験なし、経験-開示あり、経験-開示なし）=（0, +1, -1）

回避次元得点の分析では、性別のみが有意な効果であった、 $t(438) = -2.65, p < .01$ 。男子は女子より回避次元得点が高かった（20.07 vs 18.57）。残りの効果は有意ではなかった。

アンビバレント次元得点も同じように分析した。性別の主効果は有意ではなかった。いじめの被害者経験の有無対比（C1）は有意であり、 $t(436) = -2.06, p < .05$ 。いじめの被害者経験群のアンビバレント次元得点は非経験群より高く、仮説1が支持された。自己開示の有無対比（C2）は有意でなく、自己開示の有無とアンビバレント次元得点には関係がなかった（仮説2の不支持）。性別×経験有無対比（C1）交互作用は有意ではなかった。仮説3を検定する性別×自己開示有無対比（C2）交互作用は有意であった、 $t(434) = -2.62,$

$p < .01$ . 女子の自己開示者は非自己開示者よりアンビバレント次元得点が低かったが、男子ではむしろ逆の傾向がみられた。

### 自己開示の相手分析

仮説には含まれていないが、自己開示の相手分析を、いじめにあった時期を児童期（幼稚園、小学校）と思春期（中学校と高校）に分けてした。自己開示の相手割合は、児童期では両親、友だち、先生/その他の順に66.0%、23.4%、10.6%であり、思春期では34.3%、45.7%、20.0%であった。開示相手×時期のカイ自乗検定は有意であり、 $\chi^2(2) = 8.07$ ,  $p < .02$ , 自己開示の相手は児童期から思春期にかけて、両親から友だちに移行する傾向であった。次に、自己開示の相手の愛着次元得点への影響を調べるため、自己開示相手群を効果コーディング化（Cohen & Cohen, 1983参照）して、仮説検定の分析同様、階層的重回帰分析を行った。最初のコードは（両親、友だち、先生/その他）=（1, 0, -1）で両親と他の2群を比較した（両親対比）、次のコードは（両親、友だち、先生/その他）=（0, 1, -1）で友だちと他の2群を比較した（友だち対比）。これら2対比は独立している。性別とこれらの主効果対比を掛けあわせ、性別×対比（両親、友だち）交互作用効果を作った。上記の仮説検定の分析同様、この分析でも愛着の各次元得点を基準変数、性別、コード変数（開示相手効果：両親対比、友だち対比）、性別×コード変数（性別×両親対比と性別×友だち対比）が説明変数であった。アンビバレント次元分析のみで開示相手効果（友だち対比）が有意であった、 $t(78) = -2.03$ ,  $p < .05$ . 友だちに自己開示した者のアンビバレント次元得点は他の相手に開示した者より低かった。性別との交互作用は2つのコード変数とも有意であった。性別×両親対比交互作用、 $t(76) = 2.17$ ,  $p < .05$ , はアンビバレント次元得点が両親に開示した男子の間で他の2群より低かったが、女子の間では差がなかったことを示す。有意な性別×友だち対比、 $t(76) = -2.00$ ,  $p < .05$ , は友だちに開示した者の低いアンビバレント次元得点が女子により顕著であったことを示す。参考までに、アンビバレント次元得点の開示相手別平均値は、22.14（両親）、20.93（友だち）、27.88（先生/その他）であった。男子の平均値は、両親、友だち、先生/その他の順に21.53、26.38、28.43であり、女子の平均値は、22.46、18.63、25.20であった。後述するが、興味ある点は友だちに自己開示した被害者の間で、アンビバレント次元得点に男女差が見出されたことである。

### 考察

本研究の結果を要約すると以下の如くである。成人期の愛着（安定次元とアンビバレント次元）はいじめられた経験のみならず、その経験を誰かに自己開示したかどうかと関係があった。過去にいじめられた経験を持つ者は安定次元得点が低い傾向であった。また、いじめられた経験を自己開示した者は、しなかった者より安定次元得点が高かったが、この自己開示の影響は女子のみに認められた。アンビバレント次元得点にもいじめられた経験と自己開示の影響が見い出された。いじめられた経験のある者のアンビバレント次元得点は経験のない者より高かったが、経験の自己開示の影響には男女差があった。女子の間では、経験を自己開示した者はしなかった者よりアンビバレント次元得点が低く、男子の間では逆のパターンが得られた。つまり、女子の間では誰かに自己開示することで、いじめられた経験をむしろ肯定的な方向に転換できたが、男子の間ではいじめにあった経験が否定的な影響を与えたのみならず、自己開示した者のアンビバレント次元得点が高かった。いじめの被害者経験、自己開示は回避次元得点と関係がなかった。安定次元の分析では、仮説1と2が、アンビバレント次元の分析では仮説1が支持された。仮説3については、男子の間では、主効果のパターンが見られなかった（安定次元）ばかりか、予想とは逆の傾向（アンビバレント次元）が見られた。更には、仮説外の分析でも、アンビバレント次元得点で、友人への自己開示者の得点に男女差が見られ、自己開示の意味に男女差があることを示している。

### いじめの被害者経験・自己開示

いじめの被害者経験は、安定次元得点を減少させ、アンビバレント次元得点を増加させた。いじめられた経験それ自体が対人不全を招いたと言える。これは、児童・思春期での虐待的対人関係が大学生になった現在の対人関係のあり方に影響を及ぼしていることを示す。この結果は坂西（1995）のいじめの長期的影響の研究や臨床的診断の結果と一致し、いじめは愛着という対人関係の基本的姿勢に影響することが明らかになった。本研究では、いじめられた経験の自己開示の影響も調べた。結果には興味ある男女差が認められた。以下では自己開示と愛着との関係の結果に解釈を加える。

いじめられた経験の自己開示がなぜ被害者経験の影響を緩和したのであろうか。本研究の仮説に従えば、自己開示者はいじめられた経験の自己開示を通して、ソーシャルサポートを得、援助的対人関係の存在を確認するこ

とで、愛着をより発展させることができたと考えられる。自己開示研究（榎本，1997）や、社会的相互作用研究は自己開示の対人好意への肯定的影響を示し、この解釈を支持する。更には、ソーシャルサポートの有効性とはサポートの必要な人が援助・受容的な対人関係を得ることにより、社会的欲求を充足させ、自己と他者に対して肯定的な態度を増大することであるといえる（Sarason, L., Sarason, B. R., Brock, & Pierce, 1996）、つまり、いじめられた経験の自己開示は、Simpson & Rholes (1994) が愛着の強固効果（steeling effect）と呼ぶ愛着の増大をもたらしたものと解釈できる。

いじめられた経験の自己開示がなぜ女子の間で被害者経験の影響を緩和し、男子の間ではむしろ逆の影響をもたらしたのだろうか。一般的に言って、女子の方が男子より質量ともに自己開示に長けていることを考慮し、自己開示の影響は男子に比べ女子により顕著に見られると仮説した。しかしながら、自己開示は男子の愛着を強固にしなくむしろ逆にアンビバレント次元得点を増大させる方向に働いた。自己開示を通して人は他者と親密な関係を結び愛着を発展させると考えたが、その反面、本来対等であるべき友人への自己開示は自己のひ弱さや悩みを露呈することにもなる。男子は女子よりも自己開示に対して否定的であるという報告もあり（Petronio & Matin, 1986）、男子に課せられた性役割が自己開示の肯定的影響を妨げたばかりか、開示者の否定的自己観の形成につながったと想像できる。社会的相互作用の実証研究（Wheeler & Nezlek, 1977）は男子の友人関係は活動を共有しあうことによって深まり、女子の友人関係は内面的世界の共有によって深まることを報告している。更には、女子は相互作用相手の孤独感を低減することに長けていることも明らかにされている（Wheeler, Reis, & Nezlek, 1983）。悩み事などの自己開示は、男子の対人関係にはそぐわず、他者の自己開示には男子は女子に比べて非力であるといえよう。自己開示が愛着の発展に対し肯定的な結果を示さなかったことや、仮説外の分析で明らかになったように、友だちに自己開示した男子のアンビバレント次元得点が高かったことも男女の性役割に根ざす対人関係の在り方と関わっているように思われる。

本研究の結果には別な解釈も可能である。もともと安定次元得点が高かった者やアンビバレント次元得点が低かった者が、いじめられた経験を他人に開示できたとも考えられる。つまり、いじめられた当時の愛着の在り方が、対処方略に影響した可能性を指摘できる。この指摘は愛着の型がストレス時にストレスの否定的影響を緩和

するという結果（Hammen, Burge, Daley, Davila, Paley, & Rudolph, 1995; Mikulincer, Florian, & Weller, 1993）と一致している。例えば、Hammen, et al. (1995) は愛着と対人ストレス、心理的適応を1年間の継時的研究で行ったが、対人関係ストレスに起因するうつ病や心理的不適応症状は安定次元得点の高い者ほど軽減され、逆にアンビバレント次元の高得点者ほど増幅されることを見いだした。愛着の在り方そのものが対人関係ストレスに対して緩衝効果を発揮したということである。しかしながら、これらの研究は対人ストレスに伴う愛着の変化を検証していないので自己開示によって得られた援助的關係が愛着の在り方を変えた可能性を否定するものではない。愛着の変化を測定した研究では、Feeney, et al. (1994) が新婚1年後の愛着の次元は後の結婚生活の満足度を予測しつつも、愛着の次元得点は結婚生活の満足度によって変化したことを報告している。つまり、いじめられた経験など大きな対人出来事が愛着の在り方に影響を与えたという解釈に無理はないと言えよう。

第三の可能性として、現在の愛着の在り方が過去の経験の再解釈を行い、いじめられた経験、自己開示の記憶への回答を歪曲したと指摘できるかもしれない。この指摘を間接的に支持する結果として、回避次元が唯一有意な結果を示さなかったことが上げられるかもしれない。成人期の愛着研究は、回避傾向の高い者は自己防御的な抑圧傾向が高いことを示している。例えば、Mikulincer & Orbach (1995) は、回避型の被験者は、過去の否定的な出来事の記憶の再生に時間がかかり、また経験にまつわる否定的感情を認めない傾向が高いことを見いだした。本研究に即して言えば、回避次元高得点者はいじめられた経験の記憶を意識的、無意識的に抑圧したと指摘できるかもしれない。この議論に従えば、回避次元得点の高い者はいじめられた経験を認めず、いじめられた経験が無い者は回避次元得点が低く（本研究の仮説1に従って）、中間得点者ほどいじめられた経験を認める、と仮説できよう。この愛着回避者の自己防御的回答操作仮説を、重回帰分析で基準変数と説明変数を逆転させ追加分析した。経験有無対比（C1）を基準変数、性別、回避次元得点（直線）を方程式に挿入後、回避次元得点の自乗値（curvilinear、回避次元得点の2次曲線）を説明変数として挿入した。有意な正のU字型2次曲線効果が自己防御的回答操作仮説の支持である。結果は高回避傾向者の自己防御的回答操作を支持しなかった、 $t(436) = .88, ns$ 。同じ分析を自己開示有無対比（C2）を基準変数として行ったら、2次曲線効果は傾向意であ

った,  $t(436) = 1.92$ ,  $p < .055$ . つまり, 回避次元得点が高い者と低い者ほど, 中間得点者よりいじめられた経験を自己開示したと答えたわけである. 明瞭な解釈は不可能であるが, 否定的経験の自己開示は愛着回避者の自己防御的回答操作とはむしろ逆の結果である.

大多数の被験者は無記名回答をし, 小数の被験者には学生番号のみの記入を求めたので, 防御的回答操作の可能性は少なかったと思われる. また, いじめの被害者体験はだれにとっても, 大きな経験であり, 忘却してしまうことは難しいと考えられる. 追加分析の結果を考慮すると, 現在の愛着の在り方がいじめの質問項目への回答に影響を与えた可能性は低いように思われる.

いじめられた経験とその経験の自己開示が回避次元得点とは関係がなかった. この結果については推測の域を越えないが, 二つの可能性が考えられる. 最初に, 回避次元得点は他の次元得点よりもさまざまな経験に比較的影響されやすいと推測できる. 松本 (1998) による9ヶ月の再テスト信頼性は, 3つの下位尺度中, 回避尺度が一番低く( $r = .55$ ), 回避次元得点が一番変化しやすいことを示している. いじめられた経験以降の多くの出来事が回避次元得点に最も影響したという推測が可能である. 第二に, いじめ集団内の対人関係の特異性が考えられる. いじめの被害者は必ずしも集団から一貫して疎外されなく, 集団内でいじめの被害者と加害者の立場が入れかわるケースもあることが報告されている (森田・清水, 1986). いじめの被害者は一貫して集団から虐待されているわけではなく, いじめる側に付くことにより集団から承認が得られる場合もある. この対人関係の首尾一貫性のなさは, アンビバレント次元の先行条件であり (Bowlby, 1973a), いじめられた経験は回避次元ではなくむしろアンビバレント次元に影響すると考えることも可能である.

本研究の問題点の一つは, 本研究は縦断研究ではなく, いじめられた経験を過去を振り返る回顧法に頼り, 現在の愛着しか測定できなかったことである. 過去のいじめられた経験とその自己開示を現在の愛着次元得点の説明要因として取り扱ったが, 愛着の緩衝効果, 現在の愛着の在り方が結果に影響した可能性を完全には否定できない. 本研究の結果の解釈には方法上の限界に起因する不明瞭さが残る. 今後の研究方法課題として縦断的研究の必要性を書き添えておきたい.

## まとめ

本研究では成人期の愛着と過去にいじめにあった経験とその自己開示との関係を調べた. 結果は児童期, 思春

期のいじめの被害者経験はその後の愛着の在り方に否定的な影響を与える可能性を示唆している. いじめられた経験の自己開示は援助的関係の再構築を可能とし, 愛着の発展に寄与したと考えられる. 自己開示の影響の性差は, 性役割の性差と関連していると思われる.

Bowlby (1969, 1973a, 1973b) によって理論化され, Ainsworth, et al. (1978) によって行動観察化された母子間の愛着のスタイルは Hazan & Shaver (1987) によって成人期の愛着のスタイルとして概念・測定化された. Hazan & Shaver (1987) の貢献は恋愛行動の発達の起源を愛着理論と結びつけたことにある. 社会心理学的研究の多くは, 成人期の愛着の概念の妥当性を養育者, 恋人のイメージや実際の恋愛関係に求めてきた. 本研究の成人期の愛着研究への貢献は, 児童期, 思春期の大きな出来事 (いじめ) に焦点を当てたことにある.



## 謝辞

原稿執筆に際し、桂田恵美子先生（宮崎国際大学）から貴重なコメントを頂いたことを感謝します。データ収集にあたり、川瀬千隆先生（宮崎公立大学）、菊井高雄先生（宮崎医科大学）、川添誠先生（宮崎産業経営大学）の多大なご協力を頂いたことを感謝いたします。

## 脚註

1 「いじめの継続期間\_\_\_\_\_ヶ月」という項目も含めたが、いじめの被害者経験の期間については、被験者の記憶が曖昧になりやすという指摘があり、分析からはずした。

2 本研究では階層的重回帰分析を用いたが、説明変数（いじめられた経験とその自己開示）は名義尺度であり、分散分析（ANOVA）を用いて分析するのが正しいという指摘がある。重回帰分析は、基準変数や説明変数が量的データの場合に用いられると一般的に理解されているが、質的データの分析にも量的データの分析にも対応できる一般線形分析方法である。重回帰分析は分散分析を含んだ分析法であり、重回帰分析が名義尺度に用いられた場合、分散分析と同一の結果が得られることは周知の事実である。

本研究のC1対比とC2対比の平方和の合計は、分散分析では一元配置分散分析（ $df=2$ ）の主効果の平方和（sum of squares）に等しく、本文でも触れたようにこの主効果を仮説に忠実に分割し直接検定するのがC1とC2対比である。分散分析では、自由度が2以上の効果については、仮説が明示されていれば、計画化された比較（planned comparison）（森・吉田，1990）等で仮説に従って下位分析をする。重回帰分析と分散分析の対応性については、Cohen & Cohen（1983，第5章，8章）が詳細な説明をしているので参照されたい。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: Assessed in the strange situation and at home*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Baldwin, M. W., & Fehr, B. 1995 On the instability of attachment style ratings. *Personal Relationships*, 2, 247-261.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss: Vol 1. Attachment*. New York: Basic Books.  
（黒田実朗他訳 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社 1976）
- Bowlby, J. 1973a *Attachment and loss: Vol 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. （黒田実朗他訳 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社 1977）
- Bowlby, J. 1973b *Attachment and loss: Vol 3. Sadness and Depression*. New York: Basic Books. （黒田実朗他訳 母子関係の理論 III 愛情喪失 岩崎学術出版社 1981）
- Burda, P. C., Vaux, A., & Schill, T. 1984 Social support resources: Variation across sex and sex role. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 119-126.
- Cohen, J., & Cohen, P. 1983 *Applied Multiple Regression/Correlation Analysis for the Behavioral Sciences* (2nd Ed). Hillsdale, N.Y.: Erlbaum
- Davila, J., Burge, D., & Hammen, C. 1997 Why does attachment style change? *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 826-838.
- Dindia, K., & Allen, M. 1992 Sex differences in self-disclosure: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 112, 106-124.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- Feeney, J. A., Noller, P., & Callan, V. J. 1994 Attachment style, communication and satisfaction in the early years of marriage. In K. Bartholomew & D.L. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships* (Vol. 5, pp.269-308). London: Jessica Kingsle Publishers.
- Hammen, C. L., Burge, D., Daley, S. E., Davila, J., Paley, B., & Rudolph, K. D. 1995 Interpersonal attachment cognitions and prediction of symptomatic responses to interpersonal stress. *Journal of Abnormal Psychology*, 104, 436-443.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987 Conceptualizing romantic love as an attachment process. *Journal of*

- Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1994 Attachment as an organizational framework for research on close relationships. *Psychological Inquiry*, 5, 1-22.
- Kirkpatrick, L. A., & Hazan, C. 1994 Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, 1, 123-142.
- 松本忠久 1997 後期青年男子の対人内部的作業モデルと自己統制との関係 秋田論叢 13号, 25-42
- 松本忠久 1998 内部的作業モデル測定尺度の信頼性研究—後期青年男子における— 秋田論叢 14号, 143-150
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. 1993 Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 817-826.
- Mikulincer, M., & Orbach, I. 1975 Attachment styles and repressivedefensiveness: The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 917-925.
- 森敏明・吉田寿夫 1990 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房
- 森田洋司・清水賢二 1986 新訂版 いじめ 金子書房
- Pennebaker, J. W. 1989 Confession, inhibition, and disease In Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol 22, pp.211-244). San Diego: Academic Press.
- Petronio, S., & Martin, J. N. 1986 Ramifications of revealing private information: A gender gap. *Journal of Clinical Psychology*, 42, 499-506.
- Rivenbark, III, W. H. 1971 Self-disclosure patterns among adolescents. *Psychological Reports*, 28, 35-42.
- 坂西友秀 1995 いじめが被害者に及ぼす長期的影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究 11, 105-115.
- Sarason, I. D., Sarason, B. R., Brock, D. M., & Pierce, G. R. 1996 In C. D. Spielberger, G. Sarason, J. M. T. Brebner, E. Brenglass, P. Laungani, & A.M. O'Roark (Eds.) *Stress and Emotion: Anxiety, Anger, and Curoosity* (Vol, 16, pp. 3-27) Taylor & Francis, Washington, DC.
- Scharfe, E., & Bartholomew, K. 1994 Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, 1, 23-43.
- Simpson, J. A., & Rholes, W. S. 1994 Stress and secure base relationships in adulthood. In K. Bartholomew & D. L. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships* (Vol. 5, pp. 181-204). London: Jessical Kingsle Publishers.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton
- 立花正一 1995 「いじめられた体験」と精神障害 *imago* 16, 125-131
- 高橋恵子 1968 依存性の発達的研究: II 大学生との比較における高校女子の依存性 教育心理学研究, 16, 26-36.
- 高橋恵子 1970 依存性の発達的研究: III 大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性 教育心理学研究, 18, 65-75.
- 高橋恵子 1980 男子大学生における愛着 国立音楽大学紀要, 14, 131-142
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度——成人期愛着スタイル尺度の試み—— 東京都立大学人文学報第 196号, 1-16.
- 戸田弘二 1991 Internal Working Models 研究の展望 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- Vernberg, E. M., Ewell, K.K., Beery, S. H., & Freeman, C. M., & Abwender, D. A. 1995 Aversive exchanges with peers and adjustment during early adolescence: Is disclosure helpful? *Child Psychiatry and Human Development*, 26, 43-59.
- Weiss, S. R. 1982 Attachment in Adult Life In C. M. Parkes & J. Stevenson-Hinde (Eds.). *The Place of Attachment in Human Behavior* (pp. 171-184) Basic Books, New York.
- Wheeler, L., & Nezlek, J. 1977 Sex differences in social participation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 742-752.
- Wheeler, L., Reis, H. T., & Nezlek, J. 1983 Loneliness, social interaction, and sex roles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 943-953.